

News Letter Vol.12 November, 2007

文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

大学院教育改革支援プログラム「新時代の地域医療学を創る人材の包括的養成」について

分子病態治療研究センター幹細胞制御研究部 教授 古川 雄祐

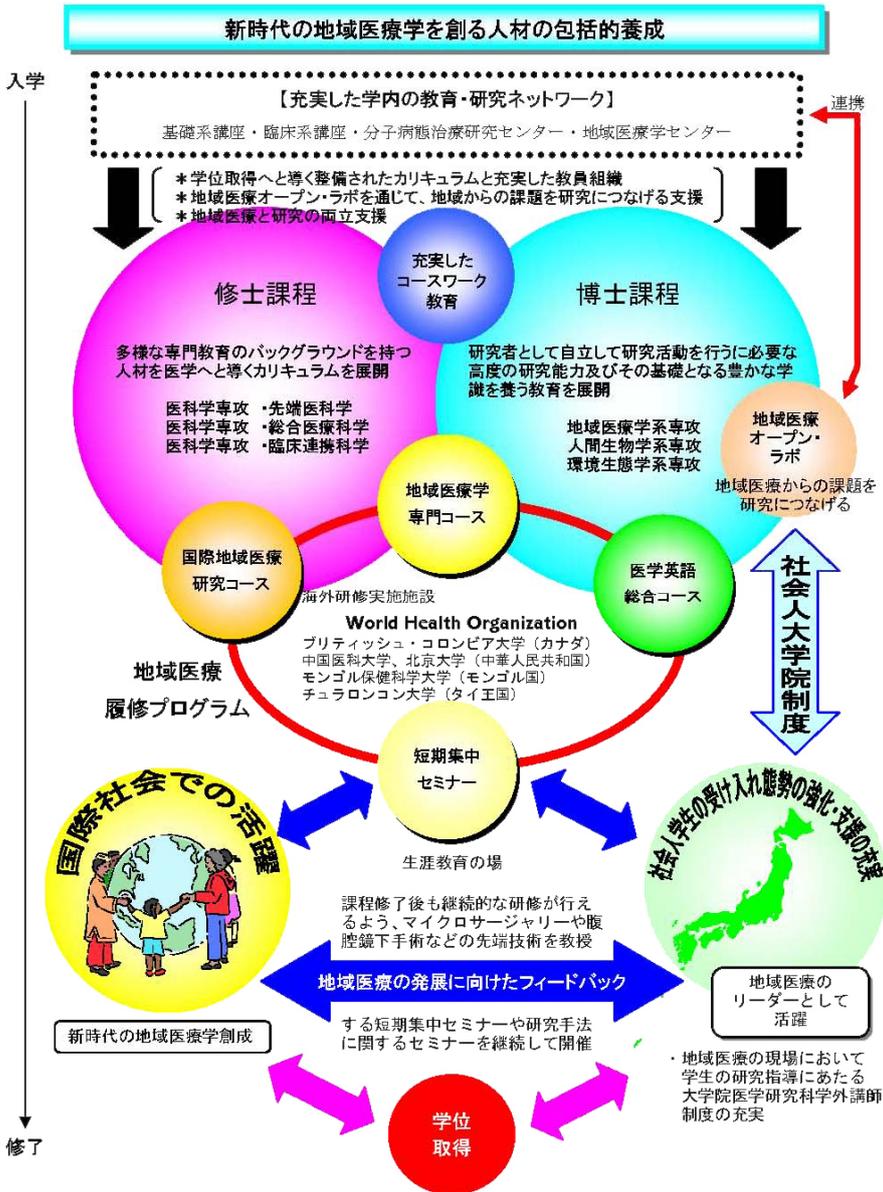


このたび文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」に、本学の「新時代の地域医療学を創る人材の包括的養成」が採択されました。このプログラムは、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の後継プログラムといえるものですが、「イニシアティブ」が大学院博士課程を対象としていたのに対し、修士課程も含み、社会の様々な分野で幅広く活躍する高度な人材を育成することを目的としています。本プログラムの医療系には53大学から63件の申請があり、書類選考ならびにヒアリングによる審査の結果、20件のうちの1件として本学が選定されました。財政支援期間は平成19年度からの3年間で、毎年5千万円を上限に経費の補助を受けることができます。

実際にどのような取り組みを行うかについては、現在、大学院医学研究科教育委員会を中心に詳細なプログラムを作成中ですが、基本理念としては、①地域医療を科学的に体系化し、新時代にふさわしい地域医療学として確立し、地域医療に従事する若手医師が大学と密接に連携できるシステムを構築すること、②地域医療のリーダーとなる医師やメディカルスタッフを体系的に養成し、地域医療学を理解する様々な人材を活用してチームを作り、地域医療を活性化することの2点を主な目的としております。①に関する具体的な計画としては、1) 地域医療オープン・ラボを拠点とした遠隔教育・研究システムの確立、2) 社会人大学院制度の一層の充実、3) 大学院学外講師制度の拡充と地域研究拠点の整備を考えております。また②に関しては、1) 地域医療学専門コースを中心とする地域医療履修プログラムの体系化、2) 短期集中セミナーの開講などが含まれます。

遠隔教育システムとして、現在はインターネットを活用した e-learning (ビデオオンデマンド) を行っておりますが、本プログラムにおいては、地域医療に従事しながら自治医大教員とのディスカッションやオンラインでのデータ解析が可能になるようにインフラ整備を行う予定です。また地域研究拠点の整備というのは、日本全国各地に研究拠点を置き、大学と地域の連携を強化して、大学院生の地域医療現場での研修・フィールドワーク・共同研究を可能とするものです。地域医療履修プログラムには図に示すように、「地域医療学専門コース」・「国際地域医療研究コース」・「医学英語総合コース」が含まれ、臨床医学、公衆衛生学、疫学、看護学、保健学、心理学など地域医療学の基本を学ぶとともに、夏期休暇などを利用して地域医療の現場で研修を行うものです。研修先には海外も含まれ、各方面のご協力を得て、WHOにおける研修を中心とする国際保健履修コース、東南アジアでの実習を中心とする熱帯医学履修コース、モンゴルや中国における疫学調査を中心とする国際疫学履修コースなど多彩な履修プランを用意する予定です。最後に「短期集中セミナー」ですが、これは医療技術トレーニング・センターや内視鏡センターのご協力を得て、夏期休暇などを利用してマイクロサージャリーや腹腔鏡下手術など先端技術の短期集中研修を行うものです。また、疫学や統計学の技法、英文論文の書き方など研究手法に関するセミナーも予定しております。これらの短期集中セミナーに参加することにより、地域医療に従事しながら、最新の医学・医療技術を学ぶことが可能となり、研究マインドの活性化が図れると期待されます。

どこまで実現できるかどうかは未知の部分もありますが、より良い地域医療の確立のため、皆様方の温かいご支援をお願いする次第です。何卒よろしくご協力申し上げます。



自治医科大学医学部卒業生の学位取得状況把握のためのアンケート結果 その8

18期生・21期生のご意見を自由意見記載欄より抜粋しました。

◆義務年限中は自分の skill を磨くために一生懸命で、研究に興味がなく、自分には縁のないものだと思っていた。都道府県で対応に差があると一部の卒業生だけが社会人入学卒の恩恵に与れるのではないか。大学から各都道府県にきちんと対応してほしい。◆情報や知識が入ってこないことが地域での一番の悩みだ。最新の情報や大学病院等最先端の声を聞きたい。◆今後、臨床医として生きていく中で、ある一定期間、医学研究に従事するのも必要ではないか。◆進路に悩んでいる卒業生には非常に有用だ。◆今、自分が行っている活動を論文にしてみたい。◆身近な方に誘われたおかげで学位取得できた。海外留学をしてみたいが、人員不足のため、見送りの可能性があり残念。◆社会人大学院が自治医科大学にあることは知らなかった。具体的にいろいろ教えてほしい。◆栃木は遠いので、近隣の大学へ通学がしたい。国内外の大学や研究機関と単位の互換を持ち、共同研究できるとそれぞれの特性が生かせる。夏期集中講座、土日集中講座、遠隔地教育(インターネット、衛星テレビ、郵送など)も整備されるとよい。◆義務内での社会人大学院入学には、出身県や前後の卒業生などとの軋轢の調整、義務後に通常の大学院へ入学することと比較したメリットがキープポイントとなる。◆義務後、他大学の社会人大学院に入学し、月火水金の常勤勤務、週に1回程度の病院当直の間に基礎研究を行っている。かなり試行錯誤の毎日だが、総合医療を行ってきた義務年限での経験と重なり合う事象が意外に多く、多方面の人物と交流ができ、有意義だ。◆義務明け後の大学院入学であれば、40歳前に学位取得し、それからの留学となり、家族のことを考えるとかなり困難。義務年限中での学位取得の道が開拓されれば、これからの卒業生の将来はもっと開けてくる。◆社会人入学卒でどのようにして学位をとるのかイメージがわきにくい。他大学の case を含め、体験談などをパンフレットに載せてほしい。◆へき地勤務中は自分の知識がこれでよいのか不安であった。こういう取り組みは大変良い。◆自分が必要と思う研究で成果(=論文)が出れば、学位にあまりこだわらなくてもいいのではないかと。研究そのものに対するモチベーションをたかめるような広報活動も必要か。自治医大にデータセンターをおいて臨床研究はどうか。◆臨床上の疑問から出発した臨床研究を行うための教育が必要。医学に限らず広い視点からの研究ができるサポート体制があるとよい。「僻地の臨床医でも研究できる」ネットワークづくりを期待する。◆現在の勤務病院で、興味ある研究テーマを持ち、学位につながれば生涯学習としてもありがたい。条件があれば希望したいので、今後も情報を発信してほしい。◆地域に根ざした研究テーマで、学費が納得できれば、ぜひ入学したい。義務年限後、僻地診療所の一人所長でがんばりたいと考えているので、この制度はうってつけだ。◆他大学で社会人大学院に入学し、研究・論文作成を行っている。この過程で得られる知識・技術は自分にとっても、臨床を行うに当たっても有用だ。卒業時に学位の意義と価値、その取得法について説明があるとよい。◆義務年限が終わる卒業後10年時には、他大学卒業生は普通にやっても、学位・専門医を取得し、一般病院でも一人前としてやっているのに対し、学位・専門医も取得困難という状態では、引け目を感じ、他大学病院にいても半人前のような感じがする。自治医大卒業生は損だと思ってしまう。後輩たちには、どんどん利用してもらい、他大学の人たちに引け目を感じないようにしてほしい。◆新たな地域医療のフィールドを生かして実のある研究のできるモデルを作ってほしい。◆日常診療を行いながらの学位取得には、自ら時間を作る努力が必要だが、現実にはなかなか難しい。新しい環境に慣れたら早いうちに学位取得を考えたい。◆現状では自治医大に定期的に通える人以外は難しいのでは。◆学生の時には、大学院に進むつもりでいたが、実際に働いている状況や家族とのかわりを考えると、なかなか踏み切れない。◆学位を希望していても地域にいるため取得できない人にとって、方法が増えることはよいことだ。◆医学生のうちから、研究を含めた卒業教育の重要性を教え込んでほしい。臨床一辺倒な卒業生が多すぎるし、義務年限後の選択肢が増えるので。◆他大学の同期の医師の多くが、初期研修後、大学院入学という進路を選んでおり、それが当たり前になっている。大学院へ行かなかったことで将来的に何らかの形で差が出たりするのか不安だ。◆地元医大と密に関わり、夜も寝ずに研究したから義務年限内に学位取得にいった。学位は容易に取れるものでも、取らせるものでもない。取りたいければ本人が努力すべき。◆研修医の頃は専門医志向もあり、認定専門医および博士号にも興味があったが、実際に僻地診療所に長年勤めてしまうと、あまり興味がなくなった。勉強する気がなくなった訳ではないのだが。◆僻地で集めたサンプルを自治医大で特殊検査や遺伝子解析などを行なえるシステムとその資金、そして必修科目を e-learning で受講できるように環境を整備してほしい。義務年限中に学位が取れるシステムがほしい。◆大学は県に人的補助を行い、博士課程を希望する医師に何らかの義務を課して大学へ引き取るべき。◆学位は自分の視野を広げる意味で興味がある。◆大学から遠い県では難しいのでは。◆義務年限が終了するもつ前から、社会人卒について周知してほしい。◆地域の医療現場では、地元の大学とのつながりがなければ、学位取得は困難であり、担当教授が自治医大卒業生のシステム(義務)について理解があるととも限らない。◆育児があるため、病棟勤務などの義務なしに大学院進学ができると助かる。◆リハビリテーションの臨床研究が自治医大でもできないかなあ。◆栃木県では遠く、やはり身近でない。将来的に地元で働くつもりであるため、研究などはより近い大学を考えてしまう。◆自治医大の卒業生は学位取得者が少ない。興味があっても機会がなかった、チャンスが増えることは良いことだ。

自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7044 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>